長野県上伊那郡宮田村

中越（なかこし）遺跡

昭和44年度緊急発掘調査概報

昭和45年3月

宮田村教育委員会

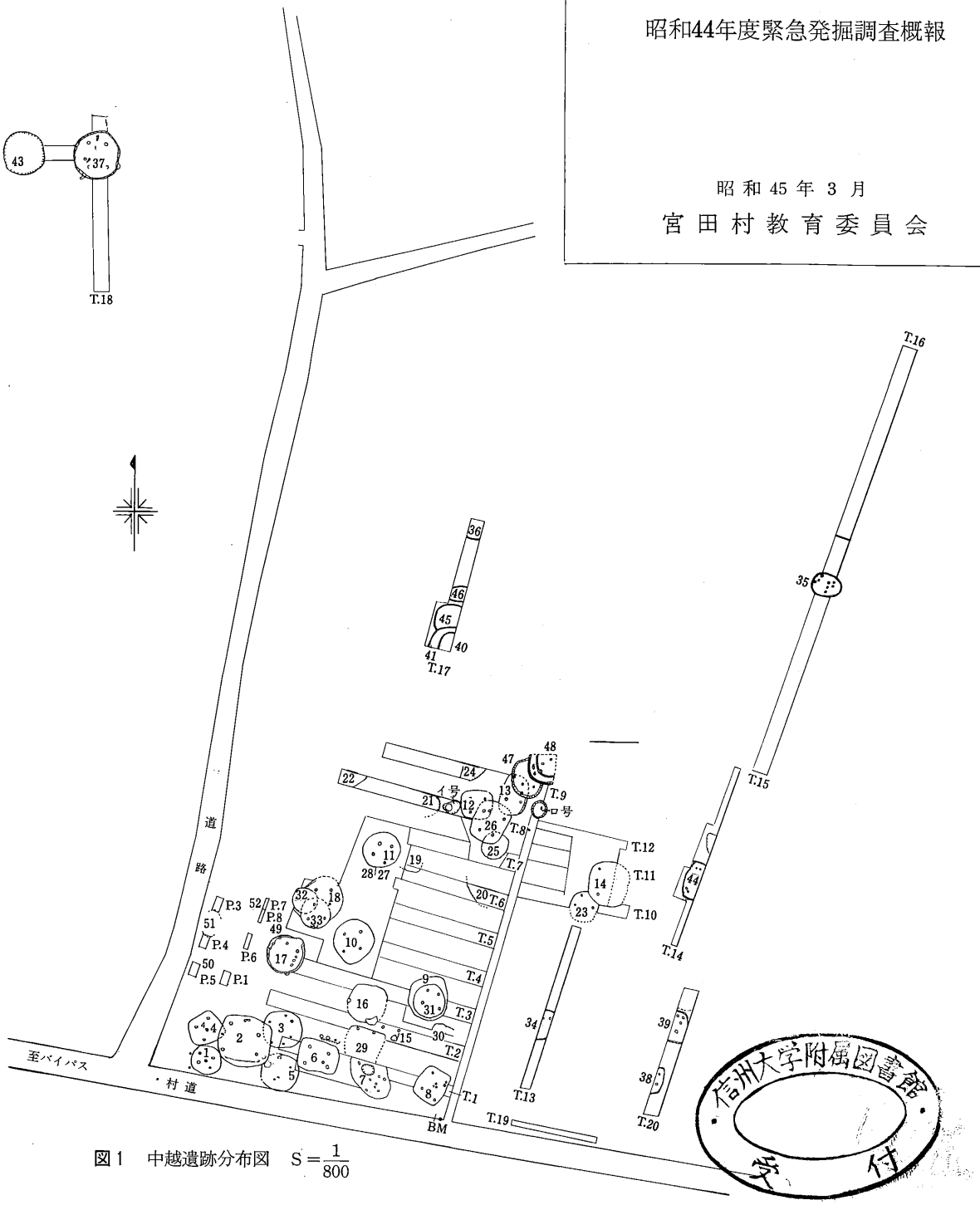


図1　中越遺跡分布図　$S=\frac{1}{800}$

信州大学附属図書館
受付

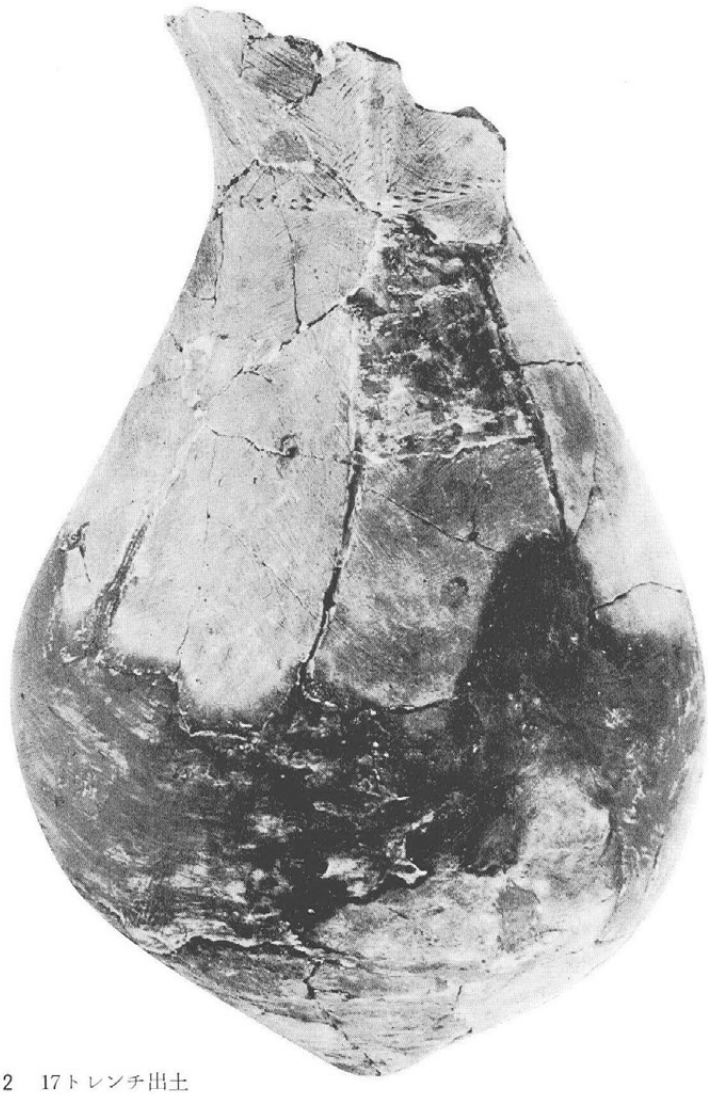


図2　17トレンチ出土

はしがき

宮田村「中越遺蹟」は，飯田線宮田駅から北東へ800m余，国道から東へ300m，近年開通した一般国道から東へ100mほど，宮田中学校の北に位置しており，大田切川扇状地左翼の堆積面で，一帯に畑地であり，あたりは，ふるく中越西原とよばれた繩文期の大遺蹟地帯である。

それが，近年の住宅化のため緊急調査の必要に迫られ行った昭和43年度の緊急調査に引つづき，更に昭和44年度も，国・県の緊急発掘許可とその補助金，ご指導を得て，緊急調査を実施し得たことは幸であった。

この発掘調査の実施にあたり，補助金や調査についてのご指導をいただいた文化庁ならびに長野県教育委員会，ご指導をいただいた顧問の先生方，連日熱心に調査に当られた調査団の方々，快く発掘を承諾下された土地所有の方々，調査に労力を提供下された老人会・婦人会・伊那市考古学会・各郷土クラブの方々に対し深く感謝の意を表する次第である。

昭和45年3月

宮田村教育委員会　教育長　細田裳徳

中越遺蹟緊急発掘調査委員会

委員長	宮田村教育委員委員長	向山　雅重
副委員長	宮田村文化財委員委員長	平沢　一男
委　員	宮田村教育委員	宮木　芳弥
〃	〃	小木曽　清
〃	〃	新谷　和美
〃	宮田村文化財委員	田中　義蔵
〃	〃	平沢　茂
〃	〃	篠田　徳登
〃	〃	小田切良彦
〃	〃　（現場責任者）	友野　良一
〃	〃　（現場責任者）	太田　保
〃	地主代表	保科今朝人
〃	宮田小学校長	伊藤　脩一
〃	宮田中学校長	堀　知哉
〃	宮田村教育長	細田　哉徳
顧　問	宮田村長	唐木　愛男
〃	宮田村議会議長	白鳥　政種
〃	長野県会議員	小田切行雄

中越遺蹟緊急発掘調査団

顧　問	上智大学教授 長野県文化財専門委員 日本考古学協会会長	八幡　一郎
〃	長野県考古学会会長 日本考古学協会会員	藤森　栄一
団　長	松本深志高校教諭 日本考古学協会会員	藤沢　宗平
調査員	松本県ヶ丘高校教諭 日本考古学協会会員	樋口　昇一
〃	松本博物館主事 日本考古学協会会員	小松　虔
〃	松本深志高校教諭	代田敬一郎
〃	富士見町教育委員会主事 日本考古学協会会員	武藤　雄六
〃	岡谷蚕糸博物館主事	会田　進
〃	長野県埋蔵文化財緊急調査員	佐藤　攻
〃	〃	遮那藤麻呂
〃	〃	木下平八郎
調査補助員	長野県考古学会会員	根津　清志
〃	〃	御子柴泰正
〃	〃	長瀬　康明
〃	国学院大学学生	小池　政美
〃	宮田小学校教諭	長　隆
〃	宮田中学校教諭	福沢　信
〃	宮田村土木課長	清水　時雄
事務局	宮田村教育委員会	加藤　勝美
指　導	長野県教育委員会指導主事 日本考古学協会会員	林　茂樹

協力者及び参加者

伊藤梅太郎	北沢今朝次郎	三浦　正雄	北沢理千恵
小林　文吾	篠田源一郎	小林　秀子	牧田あき子
伊藤　孫武	小林　いの	城倉悦太郎	小田切ます子
黒河内あさよ	城倉ちはる	春日　一正	小林　喜男
城倉　茂	平沢　栄子	春日　ちよ	平沢　銀一
春日喜代江	浦野　ちえ	丸山しづ子	小田切喜知恵
春日　長江	丸山はつ子	田中　和子	清水多喜子
湯沢　品道	春日金太郎	田中要治郎	後藤　真一
下村志げ子	春日　なみ	小田切正明	吉沢　正広
加藤きみえ	細田ちとゑ	伊藤喜和子	中谷　五郎
山田はるみ	浦野　定雄	神谷　政雄	白鳥　政種
浜田　千年	天野　彦吉	小田切幾蔵	井上　政量
吉田　一雄	小池おきゑ	春日まさ子	飯島ふじよ
山浦志づ子	平井　芳人	清水　唱三	小林はな子
牧田　政一	細田とみ子	田中いよ子	小林　夏江
新井しげ子	保科つね子	加藤きし江	新井はるよ
宮木ちゑ子	小林くに江	新井あい子	山浦　律子
新井喜和子	細田家寿子	庄野　政子	宮下　実雄
大川　俊平	伊藤美穂子	小田切準治	久保田恵美子
山本　ちえ	伊藤やよ子	伊藤ぬい子	久保田よしえ
高栖　ぎん	佐藤　花子	矢亀みつゑ	太田　すず
酒井　はる	三沢　みす	片桐　哲	下島　保美
春日　利己	下村　修	石塚　弘登	堺沢　洋治
石沢　正彦	後藤　徹	伊藤　洋一	下平津八子
織井　憲文	下平　陽子	斧研和加子	辺見恵美子
平沢きみ子	酒井　映子	戸田きよ子	西村美喜子
片桐　映子	伊藤　公子	小野沢美和子	加藤　菊子
高橋　清八	橋爪　重広	春日　幸男	保科今朝人
橋倉　誠	飯島　和雄	浦野　竜次	唐木　正清
本田　真	谷口　政一	湯沢　敏幸	高木　庄治
酒井　由夫	吉村　進	山田　年	

赤穂高校郷土クラブ，伊那弥生ケ丘高校郷土クラブ，宮田小学校宮田中学校郷土クラブ，伊那市考古学会，伊那市高尾町少年考古学クラブ。

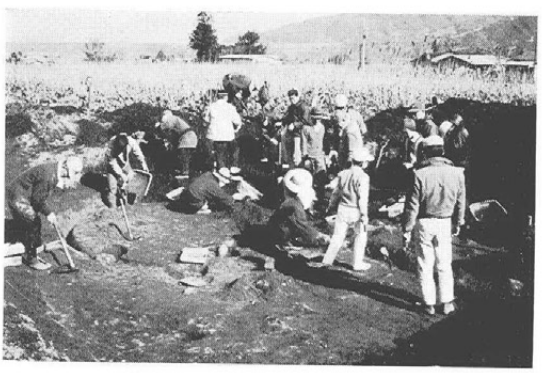


図3　47・48号住居址

発掘調査の経過

昭和44年７月22日　中越遺跡緊急発掘調査委員会を，宮田村福祉センターに開き，すでに計画を進めていた，中越遺跡緊急発掘調査の打合せを行い，宮木芳弥，小木曽清両氏をお願いし，本日より，発掘調査の準備のため事務局を宮田村福祉センターに置く。

７月26日　八幡一郎氏（顧問・日本考古学協会長・上智大教授）来村。中越遺跡発見当所から多大な御指導を受けていたが，今回は，中越遺跡が縄文時代早期終りから前期初期にあって，全国的視野から見て類例の少ない遺跡であり，遺跡の一部でも村当局で保存のため対策をたてるよう教育長に申入れた。

７月28日　晴天　夕方雷雨　藤沢宗平団長，午前10時来村。結団式を行い，団長を囲んでただちに打合せを行う。

昭和43年度における緊急発掘調査において設定したトレンチでは，全トレンチから住居址が発見し，その後の分布調査からもかなり広く遺物が分布していることがあきらかになった。今年の調査は遺物が散布している地域が，すべて縄文早期終りから前期初期の中越式時代のものかをきめるべく，できるだけ広い地域にトレンチ調査を行うため，まず，昭和43年度調査の第12Ｔ，南へ第13Ｔ南北21.5m幅１m小松虔，12Ｔ東側へ第14Ｔ南北24m幅１m小池政美，続いて北へ南北32m幅２m第15Ｔ佐藤攻，なお北へ南北25.6m幅２m第16Ｔ遮那藤麻呂，昭和43年度第９Ｔ北側に南北17m幅２m第17Ｔ木下平八郎が担当し，各トレンチとも南より２mごとに区切調査を行う。

午後１時30分　盛夏の太陽の下，作業開始。老人クラブの方々は昨年来の発掘調査にすっかりなれ，手ぶりもあざやかで調査は進む。

夕方雷雨が来て，涼しくなる。13Ｔは遺物少ない。14Ｔ３～７区に集石群が茶褐色土層面に表われる。15Ｔ第２層茶褐色土層になり薄手無文土器，石鏃，石皿，敲石，ドリル，黒耀石フレイクが出土し，11～13区に落込発見。17Ｔ表土中から，細片であるが羽状縄文や縄文を施文する中越式の新らしい土器が多く出土し，石鏃，黒耀石フレイクも多い。作業は５時30分終了する。

７月29日　曇天　７時40分集合，８時作業開始，５時終了。昭和31年調査した第１号住居址の西側は現在水田であるが，その一部が宅地としてすでに水稲を作つけしていないことがわかり，その地域を発掘調査するため第18Ｔ南北22.5m幅２mを設定し樋口昇一が担当して調査を行う。

曇天であり，わりと涼しく調査の能率はあがる。13Ｔ４～５区，10～11区土器細片出土，深耕で遺構不明調査終了。19Ｔ，14Ｔ南東西に設定，深耕により遺構不明，土器細片。14Ｔ５～８区の配石址を中心に調査。５～６区は環状集石となり，頭大配石下層から口唇刻目ある一個体土器出土。15Ｔ12～14区にかけ住居址，トレンチ両側へ拡張調査。16Ｔ黒土層遺物無く，褐色土層薄手無文土器少量出土，褐色土層中に黒土の落込あり，17Ｔ１～５区黒土層深く，縄文土器多量に出土し，石鏃28，石匕５，打石斧，磨石斧など石器類も豊富である。18Ｔ遺跡

図４　37号住居址

最北端，段丘上，水田あとで表土は硬く，１～７区まで約30cm耕土下はローム層。８区から北側黒土層深い。９区から雲母混入中厚手土器出土。本日奉仕員など参加者70名以上。

７月30日　晴夕方小雨　７時40分集合，８時作業開始５時作業終了。19Ｔ遺物，遺構無く調査終了，実測を行う。14Ｔ南に第20Ｔ南北11m幅２m設定。この地域も深耕され遺物少ない。２，３区38号６・７区39号住居址確認。遺物が少ない。14Ｔ５・６区環状集石は頭大を中心に25箇前後，集石はロームを敲いた床面上にある。７・８区は頭大河原石が５～６区にくらべ散在し遺物は出土しない。15Ｔ15～16区発見住居址35号，卵形となり遺物少ない。南北約3.5m，東西約４m，ピット６，炉址不明，東北はずれの住居址になるか。16Ｔ褐色土層から遺物少量ローム，13区黒土落込いも穴であろう。断面図を記録し終了。17Ｔ９・８・７区と北側からしだいに砂混ローム層現われて遺物出土が無くなる。１～４区を重点に調査，地表下90cm遺物多く出土し，特に石鏃23，石匕１黒耀石のフレークに混り細かい石器が出土するため，特に注意を必要とし，作業も進まない。土器は縄文や半截升管文風な文様をつけた土器が多く平底も出土する。18Ｔ８・９・10の西側２m拡張し12・13・14区に分け調査，丸く黒土の落込を確認したので東側３m拡張２mごと区切15・16・17区に分け発掘，西に向って落込みを確認したので37号住居址と命名。12・13・14区は黒土落込み深く，15・16・17区はわずかで黒褐色土になる。住居址南々西茶褐色土上面に骨片出土。

顧問　藤森栄一氏，下伊那考古学会長大沢和夫氏見学調査員参加者65名。

７月31日　曇から雨天になる。７時40分集合，８時作業開始，５時作業終了。

10時頃から小雨となり発掘には最悪状態のため主力は福祉センターで遺物の水洗を行う。午後は雨が強く降るので全員福祉センターで遺物整理を行う。

14Ｔ４・５・６区を西側へ拡張，磨製石斧，礫器が出土，配石址の実測を行う。35住居址清掃を行い写真撮影後実測，雨天になり中止。38号39号住居址深耕で壁が不安定である。17Ｔ褐色土は続き石鏃17，石匕１，土器も多い。地表下80cmトレンチ南壁に焼土が表われ，なお南に続く，４区に石鏃12本集中出土，１～４区遺物出土複雑のため西へ１m幅拡張，褐色土層中，転石，炉址状

の石組など住居址は認められないが文化層がありそうだ。18T37住居址内部褐色土を取りのぞく。褐色土層中無文土器破片多量出土，この竪穴住居址は火災を受けたので床面近く木炭が多くなる。伊那市矢島弘毅氏，岡谷市川岸宮沢隆良氏参加。

8月1日　雨天　8時集合，8時30作業開始，5時作業終了。

福祉センターで水洗作業，住居址別に整理，センターの大広間も足のふみ場もない出土遺物の量。長野県教育委員会指導主事林茂樹氏，上伊那教育事務所小松原義人氏視察。

8月2日　曇り時々小雨

発掘調査最終日にて清掃，測量，全体測量，出土遺物整理を行う。まず20Tでは，39号住居址北側に42号住居址発見調査を行い，住居址38・39・43は実測を行う。

17T 1・2区では住居址復合が複雑で，住居址約20cm上層に2～4cm厚さにロームを張床した住居址があり，又一番深い住居址は110cmにもなり，石鏃，石匕，焼土黒耀石大型コアーなど出土する。37住居址，床面近く角板状木炭・主柱及び壁柱が存在し，その間に土器群があり，実測に時間を必要，37号住居址西にトレンチを設定住居址確認。石匕，土器破片出土する。

8月3日　小雨　雨間を見ての調査，全体測量は，伊那建設事務所の山田年氏の応援で行う。一部埋戻しを始める。村内外より見学者多数あり，一日にぎわう。

17Tの住居址の復合4～5でトレンチ南東すみより1㎜の薄手壺形尖底土器出土。37住居址は，主柱4，ピット5，非常に硬い床面，壁にそって周溝が露出，床面上まで立柱状に木炭が残っていた。測量も行う。37住居址西に発見した住居址を43号とし，調査を進める。プランは4.8m，住居址内部に人頭大の自然石が多数あり，遺物はその間より出土，壁にそって周溝を発見した。

8月4日　晴天　調査終了。37・43号住居址を残して埋戻し作業。借用品返却し，備品・調査用具を福祉センターへ運ぶ。

8月20日　曇り時々小雨

埋戻しが残っていた37・43号住居址埋戻す。なお37号住居址の木炭をポリエチレングリコールで固め採集する。

8月29日　出土遺物水洗作業を福祉センターで行う。

8月30日　晴　出土品水洗作業と遺物整理を福祉センターで行う。赤穂高校生の応援があり助かる。

8月31日　晴　出土品水洗作業と遺物整理を福祉センターで行う。

11月22日　曇り午後小雨　8時集合　4時30分作業終了

今回の調査は，昭和43年度第1回緊急発掘調査に出来なかった，第3T西隅に発見した17号住居址第9T東隅に発見した13号住居址の完全発掘を当初より計画していたが，地主が作物収穫後の調査を要望したことから，本日から3日間の予定で調査を行う。

17号住居址調査は小松虔，小池政美，吉村進が主力で行う。3Tに確認する17住居址東壁を中心に2.5mのグリットを設定し耕土及び黒土層の発掘を行い，遺物石器に石斧，石鏃，石匕，錐，磨石と無文及び縄文の薄手土

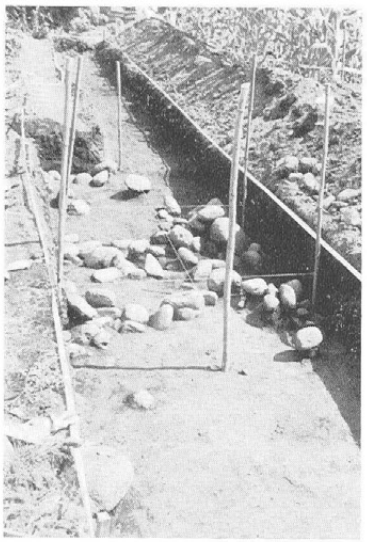


図5　14トレンチ　44号住居址

器を採集する。13号住居址調査は，木下平八郎，遮那藤麻呂が中心になり調査を行う。作業は住居址北側に主力をおき発掘を行う。13住居址東北隅を切込んで新らしく住居址が確認された。

11月23日　晴　8時集合，4時30分作業終了。

17号住居址は地表下1.15mローム層をほぼ円形に60～70cm掘って作られた住居址，主柱不明，壁よりにピットが散在し，床面近くからは石鏃，石匕，錐，磨石が出土し，土器は少量であった。また住居址北西隅，表土下約70cm北西から続いて来る住居址第49号住居址の張床が表われて来ていた。13号住居址調査は東北側に表われた第47号住居址と復合し，47号住居址プラン追求調査から新たな48号住居址を発見。この地区はなお東北へ住居址の分布が続いていることが明らかになるとともに，調査は一層の注意が必要となる。出土遺物は，47号は無文の中越Ⅰ式，48号は縄文を施文した中越Ⅲ式の土器が多い。なおこのあたりは，遺跡の保存状態は良い。

11月24日　曇時々にわか雪　8時集合，4時半終了。

寒い天候で調査思わしくない。住居址17，13，48，49実測を行う。49住居址は約$\frac{1}{3}$ほど調査を行うことが出来たが，壁から約70cm内に始め作った住居址の周溝と思われる溝を床面に発見した。午后17号住居址，西側へ幅1m長さ2mによるピット調査を行い，中越遺跡でも新らしい時期の住居址を確認し，17住居址の西側にも住居址が続いていることが明らかになる。

11月25日　曇り時々雪　8時集合，4時終了。　残った住居址の実測を行い，発掘調査終了する。埋戻し。

11月26日　埋戻し作業。

昭和45年2月1日

藤沢宗平，木下平八郎，遮那藤麻呂，向山雅重，細田教育長，友野良一，太田保，福祉センターに於いて，第2次緊急発掘調査について実績報告書作成の打合せを行い，また未整理の遺物の整理を行う。

2月2日　遺物の整理，実績報告書に必要な資料をまとめる。

住 居 址

今年度に調査した住居址は，第34～第49号址の16戸と，調査地点の西側に小ピット８ケを設定して確認した３戸（未だ名称を与えていない）の合計19戸となる。その内容は次のとおりである。

第34号址　第13トレンチ第４・第５両区にまたがり，南壁はトレンチ内でカーブしているが，北壁は深耕のためあらされて不明。

第35号址　第15トレンチ第12～第14区にまたがり，径約３米で，ほぼ円形，柱穴は大小７ケ発見されるも不規則，炉址は見当らない。石鏃，床面上５糎に１ケ発見。

第36号址　第17トレンチ第８・第９区にまたがり床面と思われるもの露われる。

第37号址　第18トレンチ第８～第10区にまたがり，ほぼ正円（4.60×4.80m），焼木床面に横たわり火災に遭ったものと思われる。土器が幾体分かそのままつがれた状態で発見。石鏃・石錐・石匕なども出土。

第38号址　第20トレンチの西側に住居址の東壁露われ，柱穴１ケ出土し，その中から薄手土器出土。

第39号址　第20トレンチ北側に出土。炉址の周囲に側壁西側に露われ，柱穴７ケ出土し石鏃発見。第42号址とその北側でダブル。第40号址第17トレンチ第１・第２区に発見。第41号址と上下関係でダブル。下位の住居の床面は地表下1.30mにあり，周溝の走向によれば，そのプランは円形と推定。薄手土器発見。

第41号址　第17トレンチ，第40号址の上位にある。そのプランは長方形を推定。出土土器は，上層からずっと神ノ木式出土。

第43号址　第21トレンチ第１～第４区に存在，円形プラン，主柱穴４ケか。種々の縄文土器の外に礫器・石鏃・石匕・石錐・打製石斧・磨製石斧・石皿・磨石など発見。第17トレンチ同様石器の出土多し。

第44号址　第14トレンチには，第５区付近と第７区付近に集石址と思われるものあり，第５区のそれを除くと住居址出土。円形プラン，床面直上に薄手土器発見。

第45・第46号址　第17トレンチ，第40・第41号址の北側に出土。互に切り合い，しかも，その後攪乱されていずれも床面と思われる堅い面が残るのみ。

第47号址　第13号址とダブって発見，円形プラン，薄手土器発見。

第48号址　第47号址とダブル。円形プランで，円内に周壁にほぼ平行に周溝風のもの残る。

第49号址　第17号址とダブルも，その輪郭は把握しがたい。

縄 文 土 器

今回の調査で特に注目されるのは第10図１にみられる破片の出土があったことと，所謂，第１類土器と呼んでいた一群の土器の出土が殆んどなかったことである。１は，秋の調査でロ号地と呼ぶ円形プランの小穴から出土し，他の薄手土器などとともに発見されたが，ただ１片にすぎず，やや，異質的なものであった。中厚手，土質も異なり焼成も余りよくなく，半截竹管ないし櫛様施文具で連続的な波状文を施したものであった。半截竹管で波状文を画く手法は，薄手土器の一部にもみられるが，これとは類を異にし，後出の櫛様施文具による波状文とも異なり，やはり，それらに先行するものと思われる。11を除く２～18は，薄手土器で厚味は２粍前後のもの，４粍前後のもの，器形は鉢ないし，甕形をなし時に壺形土器（表紙裏）もみられる。底部は，やはり，丸底風の尖底をなす。器面の調整のよいものと悪いものがあり，後者は造器の際の指圧痕を残したものである。貝殻文（12）・刺突文（16・17）・無文（13・18）などがあり，13は複合縁をなし，第11図（19～22）などとも関連あるものと思われる。19～22は複合口縁の上にも縄文を施したものも，口縁部に撰糸文のあるものなどと同じく前期初頭におかれるものではなからうか。これには，23～32などの主として単方向の縄文施文のものも含まれ，薄手土器のうちにも共存するものがあるらしい。第12図45～63は，神ノ木式に属するものである。64～74は，65・70を除き，爪形文土器であるが，繊維を含むものとそうでないものがある。

石　　器

今回の調査による石器の発見は，石鏃・石匕・石錐・剝片に細加工を加えたもの，敲石（磨石）・打製石斧・磨製石斧・礫器・石皿・一端ないし両端に加工を施した工具と思われるものなどであった。石鏃・石匕の出土は，相変らず多く，前者は約210点，後者は約36点を数えた。これに比し，打製石斧８点，磨製石斧４点は少なく，凹石の出土はなく，石槍も前年の１点あったのにその出土はなかった。なお，今回調査の第13～第21トレンチのうち，第19トレンチには石器の発見は全然なく，第17第21両トレンチに集中した感があった。住居址としても第40・第41号址が多かったと思われるが，その輪郭が不明のため，その内容はわからない。その外では，第43号址が石器84点を数えた。

（藤 沢 宗 平）

図6

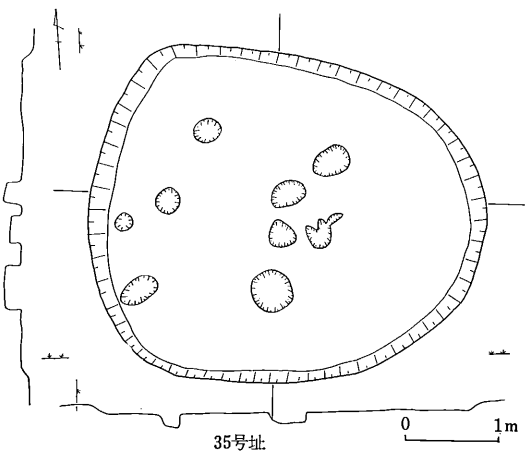
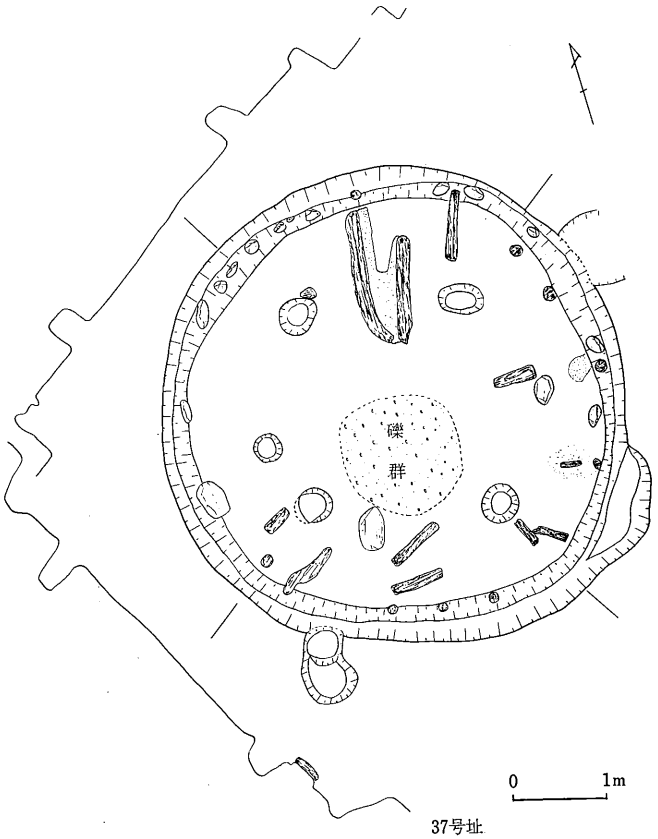


図7



37号址

図8

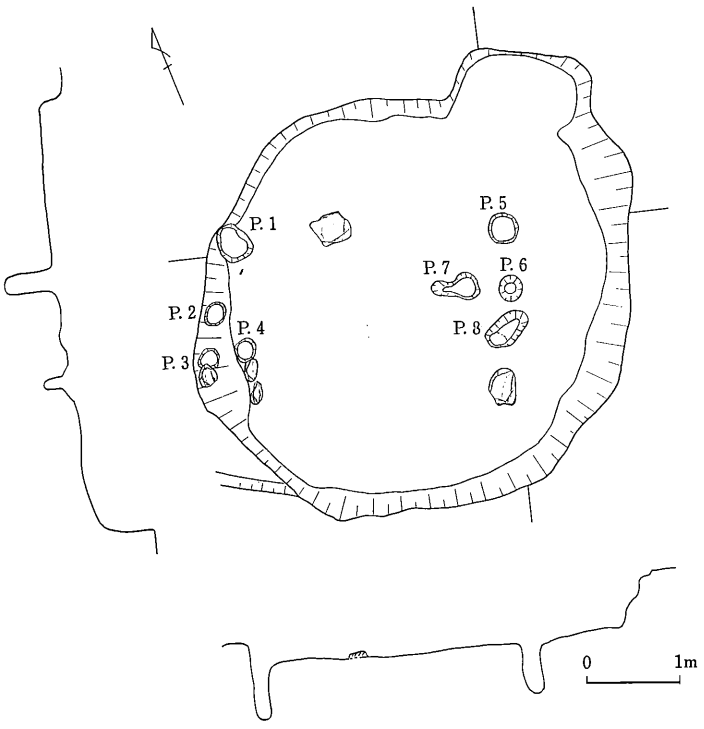
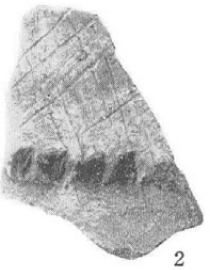
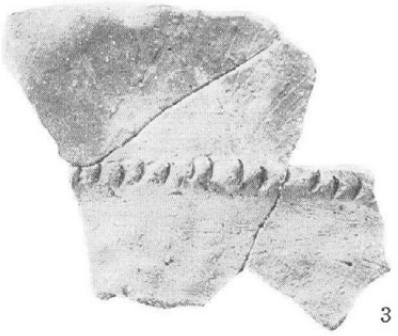
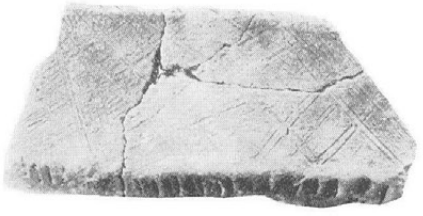


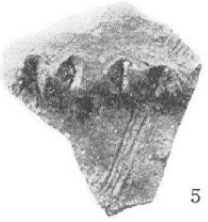
図9　17号址

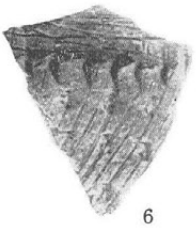
1

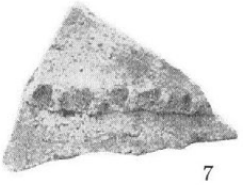

2

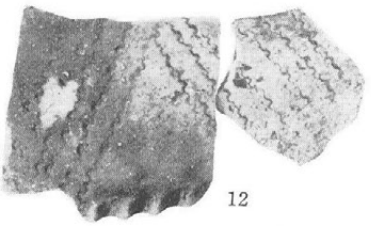

3


4

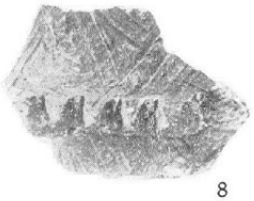

5

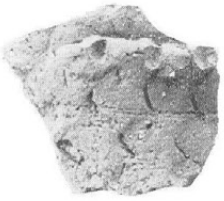

6

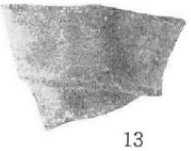

7


12

16

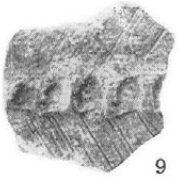

8


11

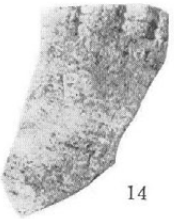

13

15

17


9

10


14

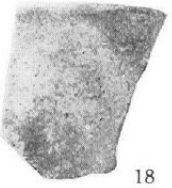
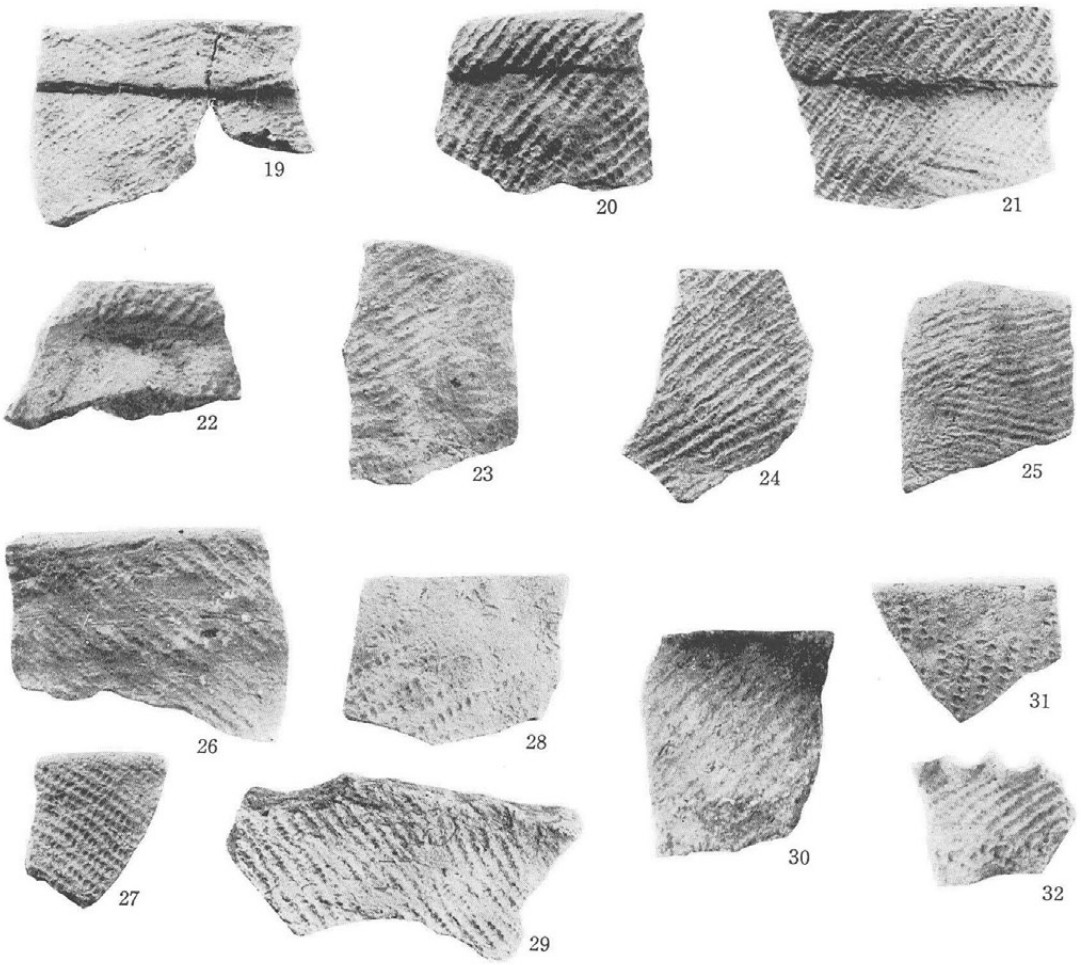

18

図10


19
20
21
22
23
24
25
26
28
31
27
29
30
32

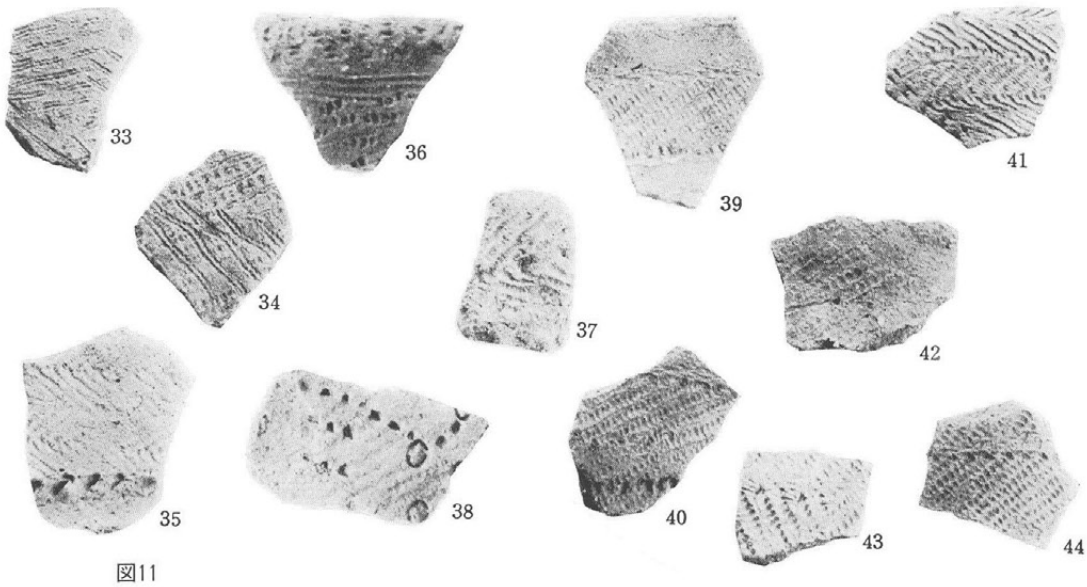

33
36
39
41
34
37
42
35
38
40
43
44

図11

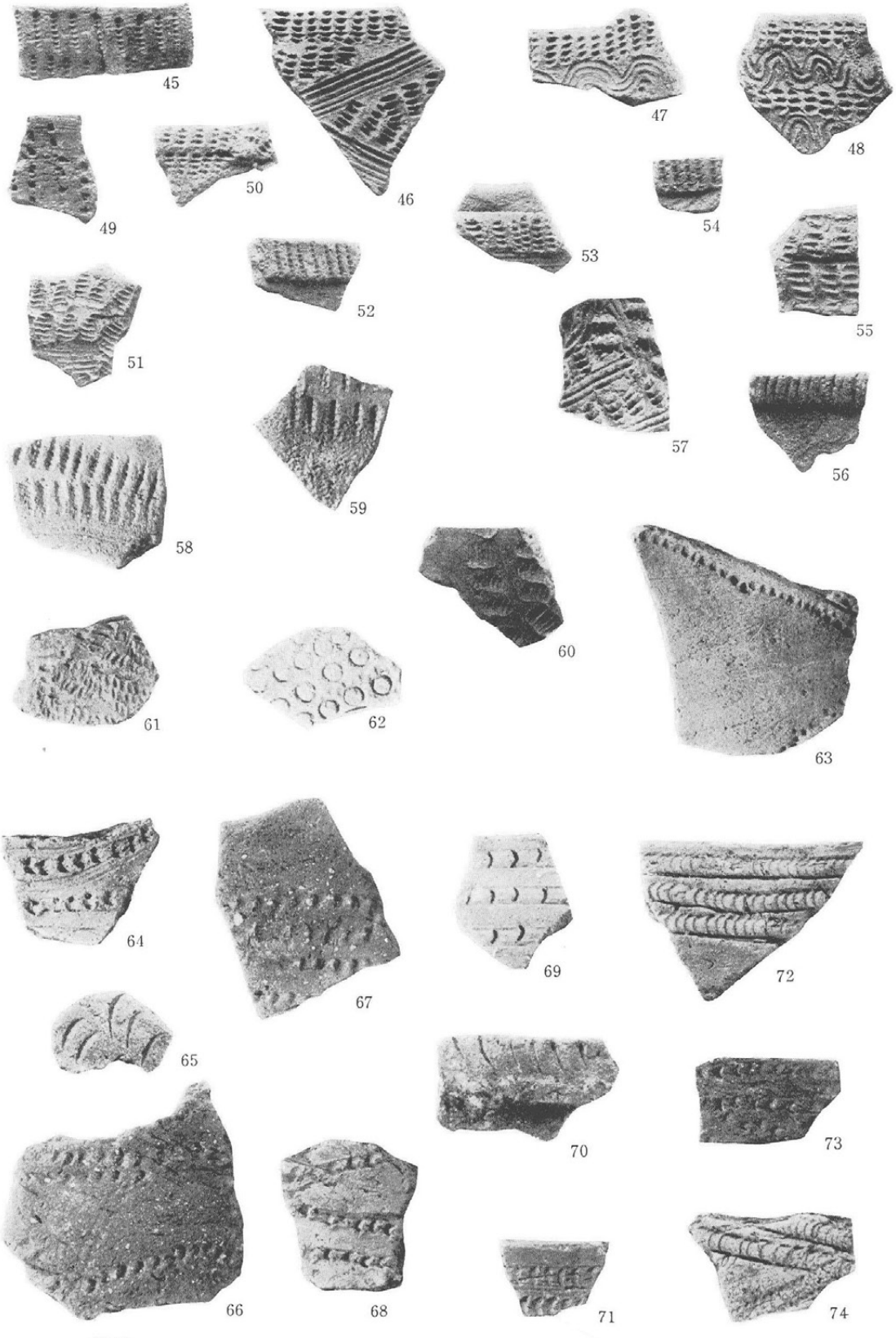
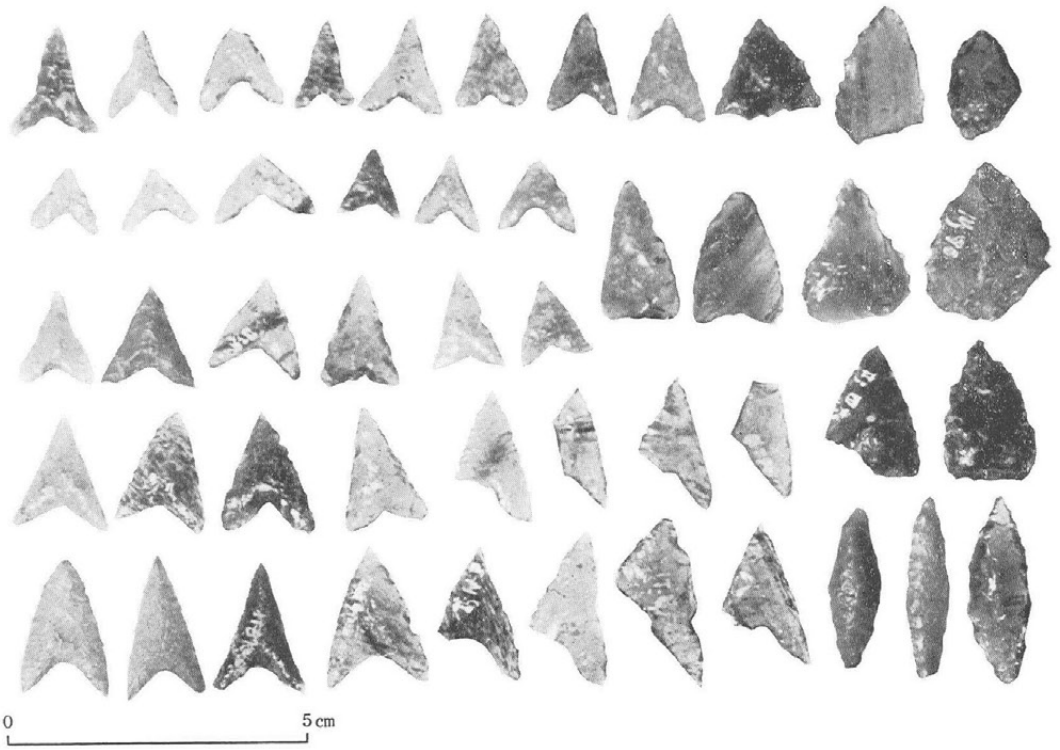

45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74

図12



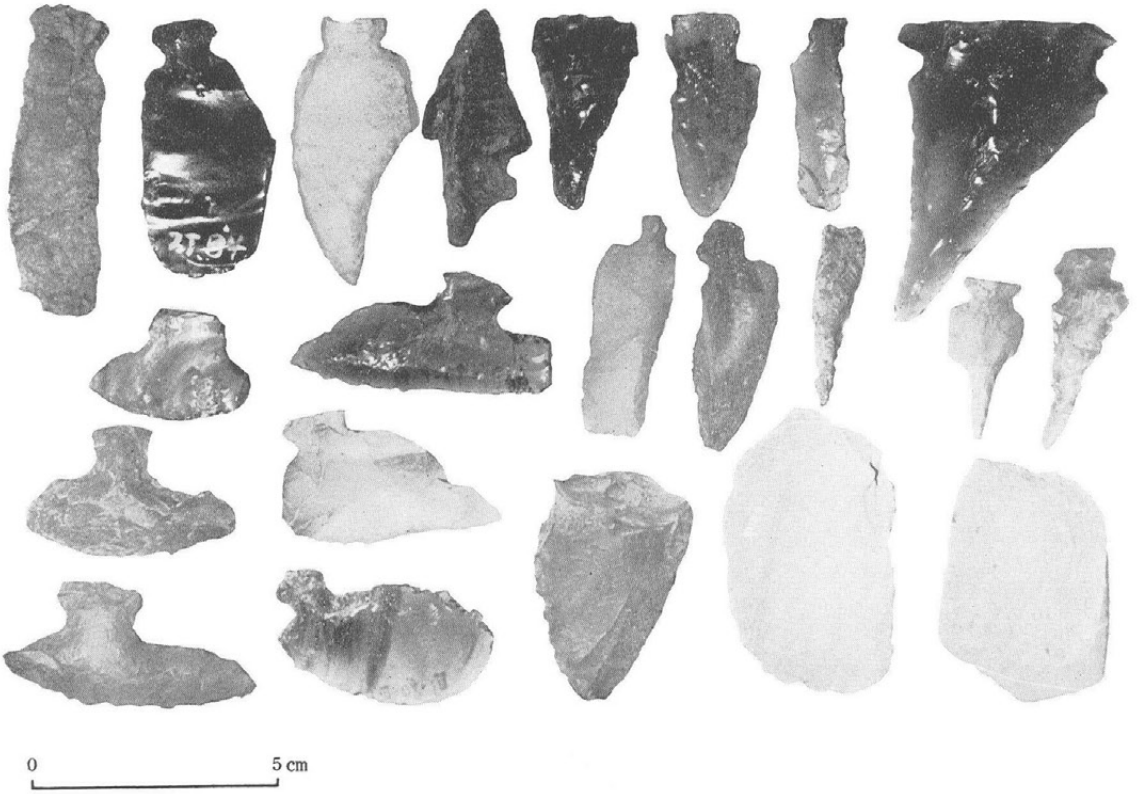


図13

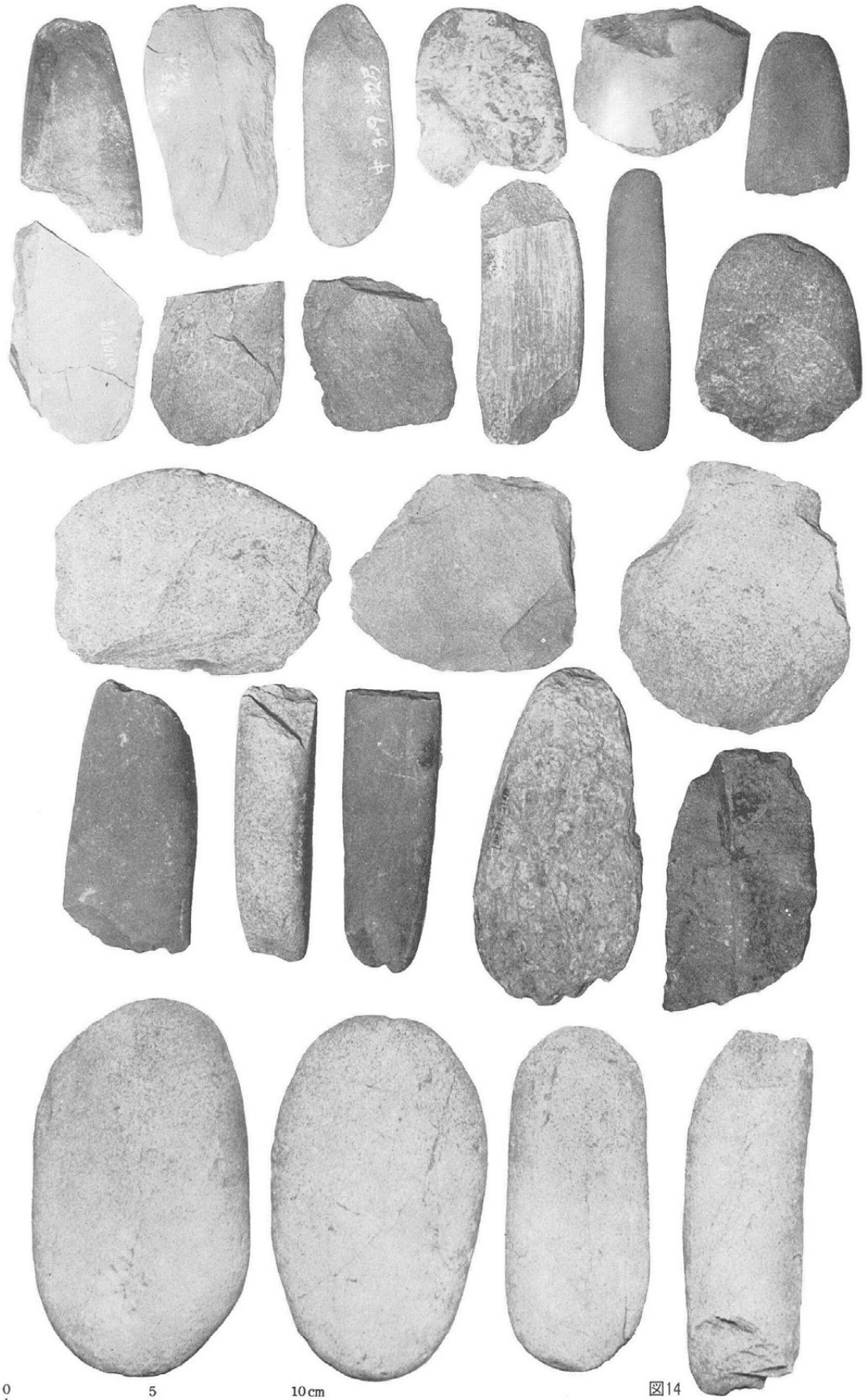


図14

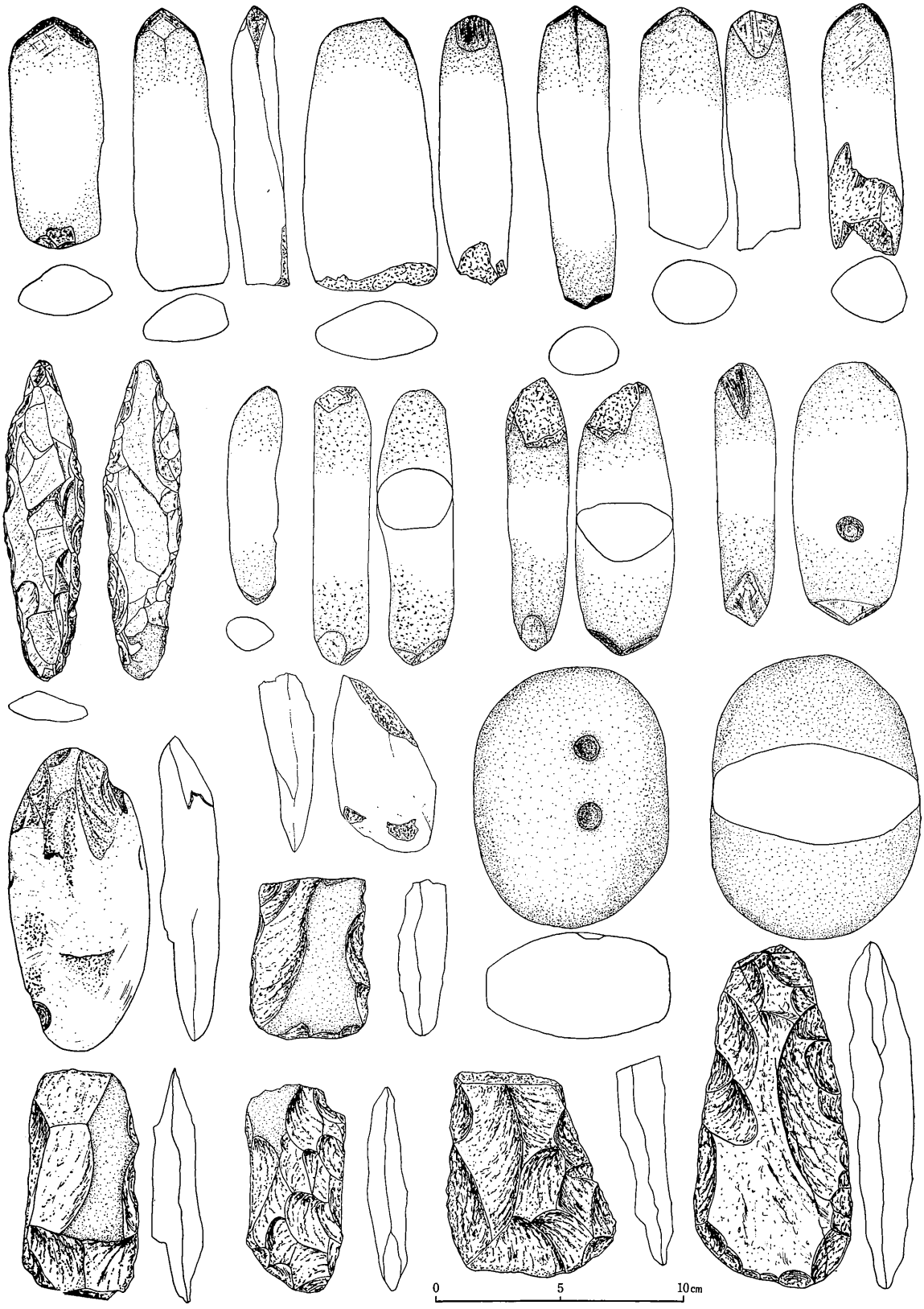


図15

ま と め

今年度の調査の目標は，1は，本遺跡の広がりを探ぐること。2は，昨年度迄の調査で竪穴住居址の存在を確認しても完掘に至らなかったものを1つでも多く発掘してそのプランを明らかにし，さらに，遺物をえてその内容を知ることにあった。

昨年度において第1～第12トレンチを設定したので，今年度は第13～第21トレンチを設定し，各トレンチに露われる住居址の状態から本遺跡の広がりについて推測のできたことは，①第16トレンチには1ケの住居址も発見されなかったことと中期繩文土器の発見のあったことから，本遺跡の東北部は限界に来たこと，（なお，本遺跡の東北地点に存在する中期繩文期の大遺跡の一角がここまで届いていることも推測される）②第15トレンチも位居址1ケしか発見されず，これより東側はその限界に近いこと。③第14，第20各トレンチも前者は住居址1ケの発見なので，第15トレンチ同様，第20トレンチは3ケの発見をみたので，或は，さらに東に若干つづくこともあるのではないかと推測されたこと。④第13トレンチは1ケ，第19トレンチはないことから，昨年度調査地点と第20トレンチの間には住居址の少ないこと。さらに，この付近は深耕のために，仮りに存在していても，元の状態を知ることは困難であることが推測されること。⑤第17トレンチは住居址4ケの出土をみたので，なお，この付近には若干の住居址が推測され，これより北にはなおつづくことも考えられること。⑥第18・第21各トレンチは各1ケ出土し，両トレンチは，前述地点より若干離れ，若し，両地点が一つの拡がりとすれば，東西 250 m，南北 200 mにも及ぶ広大な広がりが推測されるので，これを別箇のものとし，多数発見された地点を第1地点とし，第18・第21各トレンチの地点を第2地点とすることがよいのではないかと思われたこと。従って，両地点の間の調査も必要ではないかと思われたことなどである。

いずれにしても，後述するように，52ケの住居址を確認することが出来た訳で，この広い地域に，しかも，あの一時期にどれ程の住居があったかということは，この遺跡の存続期間とともに，甚だ興味のあることである。

本遺跡で発見される土器形式は3ないし4形式と考えられるが，山内博男博士の推定をおかりすれば，おそらく，150年ないし200年のものである。仮りに1住居の寿命を30年前後のもの（1形式40ないし50年，住居の切合いがしばしば行われ，それは，多くの場合，同一形式の土器が両者から発見されている。40ないし50年の間に建てかえられていることになる。なお，住居址内に往々集石のあることがあり，これは，廃屋になったことと何か関係があるのではないかと推測され，廃屋はその住居の死者の出た時と関連があるのではないか，又その死者はその家の主なる人ではなかったかなどを考慮して）とすれば，150ないし200年間には5ないし7回建てかえることが可能なことになり，仮りに，住居数50戸とすれば，平均して一時期7ないし10戸という数字が生まれる。なお，住居数の増加が考えられるとすれば（これは予測をはるかに越えるものであるが）一時期10戸前後を推測することは可能である。なお，繩文時代の存続年数が，さらに，多く推定される場合には，なお，多くの家が一時期に存在していたことになる。このような推測を間違いないものとするためには，1戸の存続年数の推測を確かなものとしなければならないことはいうまでもない。

第2の目標については，日数の関係から第17・第13号址の内容を明らかにすることによって，少しでも，平面プランの明確でないものを少なくしようと努めたが，実際には，第17号址は，上・下に重なり，下層のものは円形プランが確められたが，上層のものは明らかでなかった。第13号址は，長方形プランをなすことがはっきりとしたが，これと切合って第47号址，さらに，これを切合って第48号址の存在が確められた。いずれも，円形プランであるが，後者はその円内に一周すると思われる周溝風のものがあって，この住居が一度拡張されたのか，元来一室であった住居内に区劃を作ったものか，おそらく，前者であろうが問題を後に残した。なお，第48号址内には第44号址同様に頭大の自然石の集石があって（前年度の調査でも発見），それは，廃屋になったことと関係あると思われるが，なお，よい考えが出て来ない。

（1970,2,11　藤沢宗平）

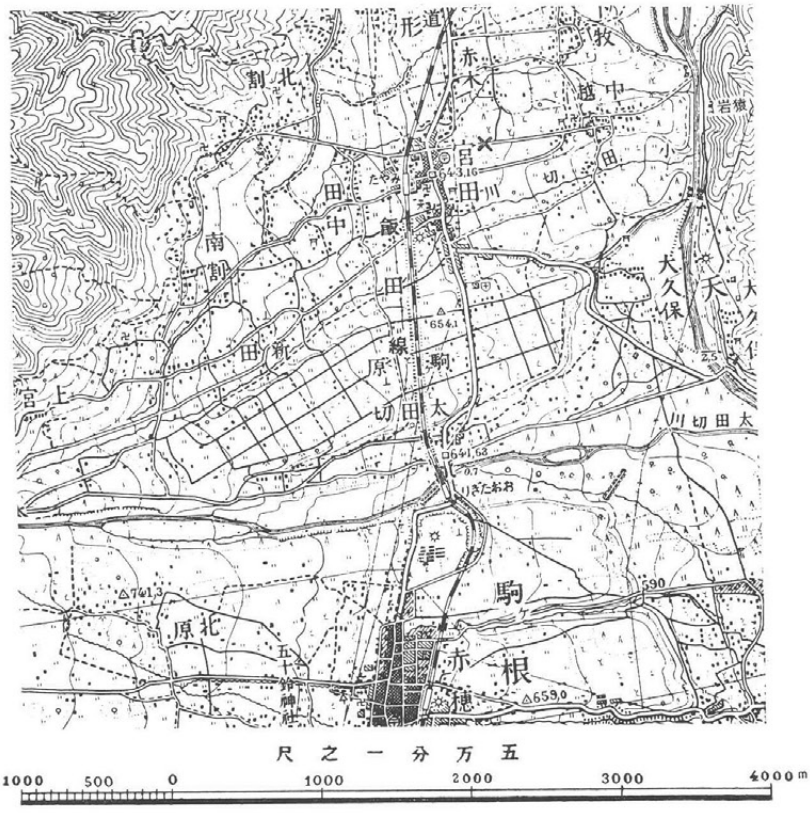


図16　中越遺跡位置

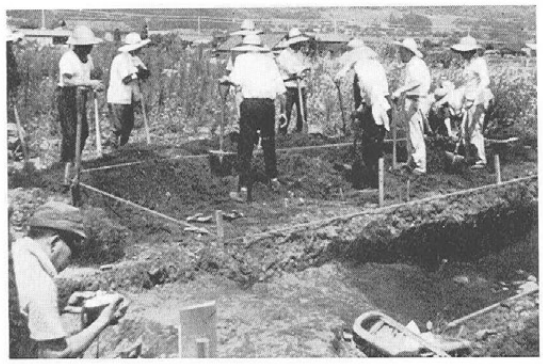


図17　第17トレンチ

昭和45年３月25日発行

長野県上伊那郡宮田村

宮田村教育委員会

（信教納）